
僕の日常

古川まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の日常

【Nコード】

N4984C

【作者名】

古川まこと

【あらすじ】

僕は毎日と同じように繰り返し返す。すべては彼女のため。・・・いや。ある意味これは、自分のため。すべては僕が、彼女のそばにいたいから。

僕はまた、いつも通りに目覚める。
誰かがそれを知らぬとも。彼女がそれに気づかずとも。僕はずつとそこにいるんだ。

* * *

ガチャリとドアが鳴った。もしくは閉まった。

その音が目覚ましになり、僕はベットから沈んでいた身を起こす。

「お帰り」

目にかかる前髪を無視して、僕は優しく微笑んだ。

だが、彼女はそんな僕に気づいた風もなく自室へと足を運ぶ。チクリと痛む胸。僕は立ち上がり、彼女の背を追った。

これもいつも通り。何も変わらない。そう、これが当たり前なんだ、と僕は自分に言い聞かす。

彼女は自室に入ると、上着を脱いでそれを丁寧にハンガーへかけた。ドアを閉めるのはその後だから、僕はそつとそこへ入り込む。物音をたてないように、静かに。

実際、僕が音をたてたとしても、その音が彼女の耳に届くはずがないのだが。もし彼女に聞こえたとしたら、きっと彼女はおびえるだろう。なにしろ彼女は昔から怖がりだったから、目に見えない自分以外の存在は恐怖するはずだ。だから僕は息をひそめ、そつと彼女を見守る。化粧台に向かう彼女を。

多分今日の化粧を落としているのだろう。

僕はその鏡を彼女の後ろからのぞきこんだ。

恐ろしくて、真に受けたくなくて。でもいつも見てしまう、現実

という名の鋭いナイフ。それはいつもどおりに僕の胸を容赦なく傷つけ嘲笑うのだ。

その鏡に映るのは、一人だけ。

唇を噛み、眼を瞑る。

痛い。

苦しい。

悲しい。

嫌だった。僕は彼女と一緒にずっといたかったんだ。なのに…。

化粧を落とし終えた彼女は、立ち上がり部屋の明かりを消す。

僕という一人がいることなんて知りもしないで、彼女は明かりの消えた部屋の戸を閉めた。

ああ。この部屋はこんなに暗かったんだ。

僕の頬に、乾ききつたはずの涙が伝った。

その後ろで閉められたはずの戸が音もなく開いていた。

帰って来て、化粧を落として、台所について。

それが僕の知ってる彼女の日課だ。

彼女の作った夕食を食べる。これは僕の日課だった。そう。

あくまで過去形だ。

とんとんとん、といつもの音が僕の鼓膜を震わせた。包丁がまな板を叩き、軽快なりズムを刻む音。

僕は調理を始める彼女を一步離れた場所から眺めていた。

レンジを使おうと、彼女こちらを振り向く。彼女の瞳が一瞬僕のそれと合った気がした、が、それはまぎれもない気のせい。彼女の瞳が僕を捉える事なんて決してないのに。なぜいつも僕はそれを期待してしまうのだろう。

僕は、ここにいる……。

きゅっと胸を押さえる。そして切なさに手を伸ばした。

こちらに、レンジへと歩み寄る彼女に、そつと。恐る恐る。
ふっ

音にするならそんな感じだろうか。

僕の身が彼女を逃した。彼女は僕の体を通り過ぎ、レンジへとまっすぐに向う。彼女の細い髪の毛が、僕の鼻先でふわりと流れた。

香りなどない。感触などない。だが、記憶の中のそれは、僕に温かく柔らかい匂いの幻を見せる。

なんでだろう。

どうしてだろう。

僕はずっと悩んでいた。

あの日から、毎日毎日こんな日々が続く。

僕が目覚めるのは彼女の帰宅のドアの音。そこから僕の記憶は始まり、そしてまたいつの間にか僕は眠っている。

いつも、いつも。

飽きもせず繰り返す。

同じことの繰り返し。

それに気づいているのに、僕ではこのサイクルから抜け出せない。行動、発言、悲しみという感情。

全部、毎日が一緒。

彼女がテーブルに食事を並べている。

僕のいない彼女の時間に、二人分の食事。

ずきり

胸が痛んだ。

それとともに迫りくる、焦るような不安。

僕の胸では、悲しみという恐ろしくも可哀そうな感情が暴れていた。

(……………来る)

そう。そろそろだ。

(来る)

あの時間。

綺麗な夜景が無情にも残酷に思える時間。

神様という存在を、即座に否定できる時間。

一つの色を残して、全てがモノクロとなった、……………あの時間。

(来る……………)

僕は耳を塞いで、眼を瞑った。

ぎゅっと押さえつけられた耳に、自分の体の音が聞こえた。

どく、どく、どく、どく、と自分の鼓動が聞こえる。

静かな時間。

突然、何かが倒れた音。食器が割れ、椅子が倒れる。

僕は眼をつむっているはずなのに、まるで瞼が透き通ってしまっ
たかのようにその映像は頭に流れ込んでくる。

花瓶が床に落ち割れる。花が散らばる。そこから溢れ出たような
赤い血潮。

全てが赤く染まる時間。

* * *

さようなら

僕は、いつもと変わらない悲しい笑顔を見た。

* * *

毎日毎日繰り返される、何一つ変わらない同じ日常。それは言葉の通り何一つ変わらない。彼女の帰りを待ち、彼女の化粧落としを見届け、そこに僕しか映らない鏡を見る。真つ暗な室内で、そこにいるのは僕だけ。電気の点いた部屋は、あくまで彼女の記憶でしかなく、彼女の閉めた戸も記憶でしかなく、実態はずっと開放たれたまま。

はたから見たら、きっと異様な光景だろう。暗い部屋、男が毎日同じ行動を繰り返しているのだから。そして、その男の毎日は同じ時間^間に終る。

僕の1日の終り。

それは、彼女の死。

あの日、彼女は殺された。元彼という名の殺人鬼にこの世界から切り離された。

その時僕は、寝室で熟睡していたから気付けなかったんだ。同じ屋根の下。一緒の場所にいたはずなのに。なのに、なぜ気付けなかったんだ。だから昔の男も僕には気づかなかった。

なんで……、なんで気づいてくれなかったんだらう。

後ろから一刺し。

即死。

それは殺された本人も気づけないほどの出来事で、本人が気付けないことをどう僕が気付こうかというのもちよつとした疑問でもあつて。けど。だけど。彼女を愛する者として、僕にはこの出来事^{出来事}に気づくべく責任があつたんだ。

彼女が現れるようになったのは次の日からだった。

僕とは違う存在になった彼女。

目を疑う僕の前で、彼女はあの日を演じ続けた。そしてそれは今も。

僕が寝ていた時、何があったのか。彼女は僕に伝え続ける。そして、最期には必ず、僕と言う存在に気が付いてくれる。確かにその時だけは、「あの日」という次元を超えて、僕の手を見してくれる。僕の心を溶かす、笑顔をくれる。その唇からは音は出ないが、形と動きは僕にこう伝えるのだ。

ごめんね、さようなら

* * *

抱きたくて、……………抱きたくて、
僕はそっと腕を伸ばす。

これもいつも通り。
君の笑顔のみが、僕を慰めてくれる。

嗚呼、君に気付いて貰えなくても、僕はまた明日、同じ場所、同じ時間に。

(後書き)

読んでいただきありがとうございます。かなり未熟な文ですが、切なさを感じていただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4984c/>

僕の日常

2010年10月8日15時29分発行